速報展

発掘された鈴鹿2007

2008. 3. 22 ～ 2008. 6. 29

無料 Take Free

境谷遺跡第２次調査　作業風景

はじめに

毎年、鈴鹿市考古博物館では、発掘調査の成果を速やかに皆様に公開するために、速報展を開催しています。この展示も今回で10回目を迎えることになりました。

さて、'07年は15遺跡（16調査区）で発掘調査を行いました。その調査の多くは開発に伴うものであるため、遺跡は調査が終了すると同時に壊されてしまいます。考古博物館の大きな業務の一つが、後世に残すことのできない遺跡を記録として残していくため丹念に調査を行うことなのです。

発掘調査の成果は、現場でありのままの状態を公開し見学していただくことが、最も望ましいと考えています。'07年には境谷遺跡と西川・郡山野・郡山野田遺跡の2調査区で現地説明会という場を設け、直接遺構や遺物を目にしていただくことができました。しかし、発掘調査の多くが調査期間が短く限られていることや、安全管理などの面から、すべての発掘現場を公開することは難しいのが現状です。

そのため、速報展では出土した遺物だけではなく、直接目にしていただくことができなかった遺跡の発掘現場の様子・遺物の出土状況や遺構の詳細なども写真パネルや図を使って、紹介していきます。

この展示を通じて郷土の貴重な埋蔵文化財とその保護への取り組みについて、より深いご理解をいただければ幸いです。

鈴鹿市考古博物館
Suzuka Municipal Museum of Archaeology
〒513-0013　三重県鈴鹿市国分町 224
TEL 059-374-1994　FAX 059-374-0986
E-mail: kokohakubutsukan@city.suzuka.lg.jp
URL: http://www.edu.city.suzuka.mie.jp/museum/

境谷遺跡　第2次

5月23日～11月30日
公共施設建設に伴う緊急調査
国分町字境谷

境谷遺跡は、鈴鹿川左岸の標高43～44ｍの段丘上に位置しています。不燃物リサイクルセンター2期事業建設に伴い2年にわたり発掘調査を行いました。第2次調査区は第1次調査区の北側で約七六〇〇㎡が対象となりました。

調査の成果として、旧石器時代にさかのぼるナイフ形石器が出土しました。この地域で活躍した最古の人々が残したものです。

弥生時代中期の竪穴住居29棟、土坑（穴）29基を検出しました。大型で円形の住居が1棟のみ確認されました。昨年発見されたものと同様に火を受けて焼け落ちています。そのほかの住居は正方形や長方形をしています。竪穴住居は炉・壁溝・主柱穴を備えるものが多くみられます。また、一か所で建て替えられ重複する例も多くあります。遺物としては、弥生土器のほか打製石鏃・磨製石鏃・磨製石剣など豊富な石器類が出土しました。弥生土器には、線で絵が刻み込まれた土器も見つかっています。

古墳時代中期（5世紀頃）の竪穴住居10棟、土坑1基を検出しました。この遺跡では初めての発見です。出土遺物は主に土師器で古式の須恵器も見られます。

古墳時代後期の遺構は少数で、竪穴住居4棟、土坑2基を検出したのみです。竪穴住居の平面形はほぼ方形で、中期のものとの大きな違いは竈を持つことです。

飛鳥・奈良時代の遺構には竪穴住居7棟、掘立柱建物18棟、土坑22基があります。特別な遺構として、平面形が二等辺三角形で、その頂点を谷側に向けている土坑があります。炭を多く含み、床面が熱を受け赤く硬化している状況から、土師器を焼いた施設である可能性が高いと考えられます。そのほかに、平安時代末頃の土壙墓1基が確認されています。古墳時代以降の出土遺物では、須恵器・土師器といった土器がほとんどを占めます。

今回の調査においても、弥生時代中期の円形住居は火災を受けていることが確認されました。このことから、住居を放棄する際にわざと火を放つ祭祀がおこなわれた可能性も指摘されています。

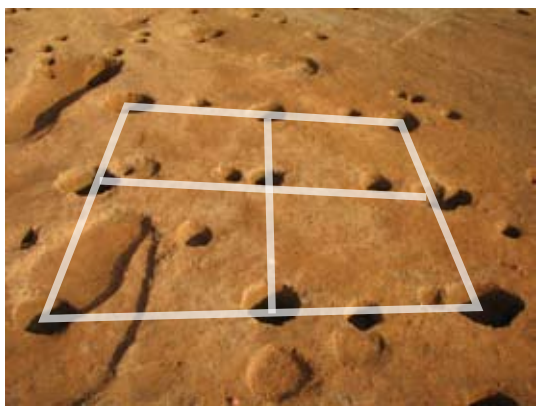
また、新たに古墳時代中期の竪穴住居が発見されました。境谷遺跡の近くの富士山1号墳などが築造された時期に相当します。この時期、鈴鹿川下流域の段丘上では古墳がさかんに造営されますが、ほとんど住居跡は見つかっていませんでした。しかし、この調査で集落域としても利用されていたことが明らかになってきました。

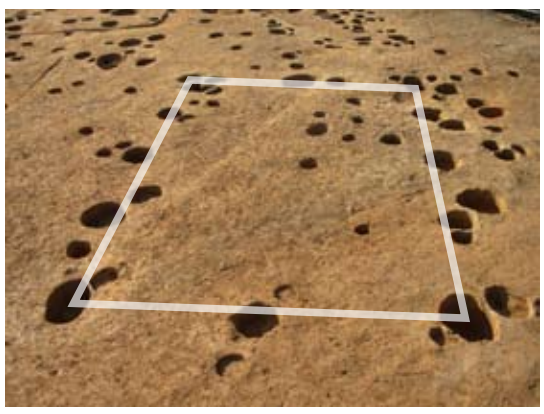
飛鳥・奈良時代には竪穴住居と

遺物出土状況

円形の竪穴住居

方形の竪穴住居

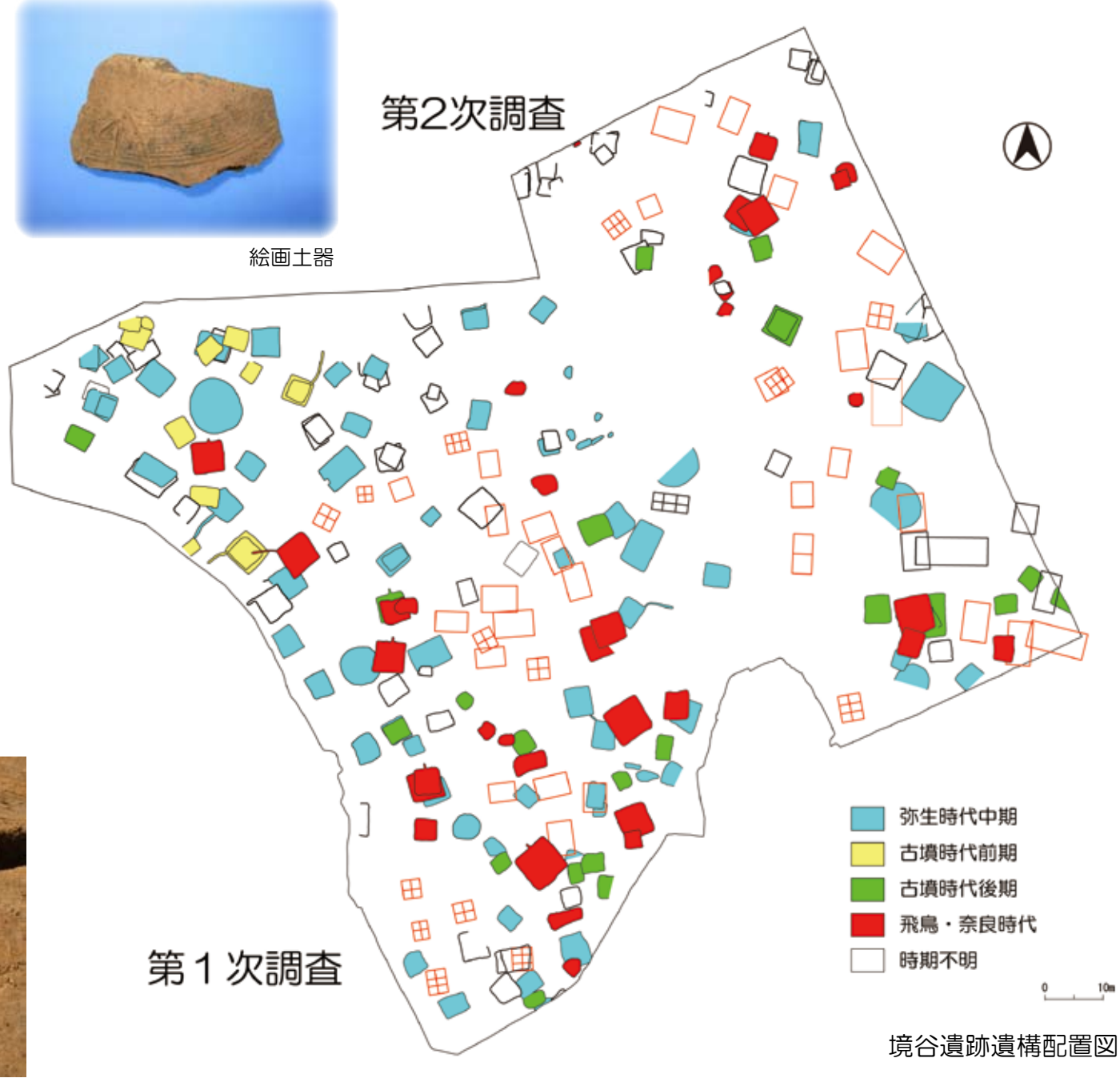

掘立柱建物


掘立柱建物

絵画土器

土師器焼成坑

遺物出土状況



境谷遺跡遺構配置図

掘立柱建物が併存するようになります。建物の向きにはある程度のまとまりは見いだせますが、きちんと方位を合わせるといった企画性は認められませんので、一般的な集落と考えられます。

国分北遺跡　第5次

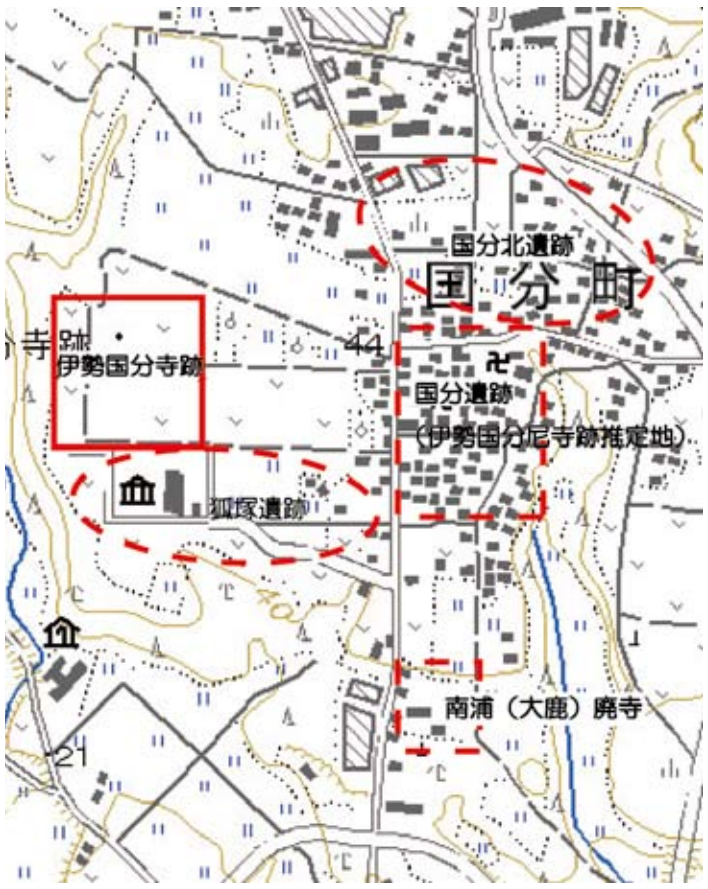
1月12日～1月18日
工場建設に伴う緊急調査
国分町字裏山

国分北遺跡は鈴鹿川左岸の段丘上に位置し、周辺には伊勢国分寺跡をはじめ、飛鳥・奈良時代から室町時代の遺跡が密集する地域として知られています。

今回の調査では、掘立柱建物5棟、土坑5基、溝3条、小柱穴を確認しました。

掘立柱建物は、いずれも調査区による制約のため、全体の規模が分かっているものはありません。詳細な時期のわからない建物もありますが、柱穴から瓦・土師器・黒色土器・灰釉陶器などが出土し、平安時代前半と確認された建物もあります。また、これらの掘立柱建物跡は概ね磁北方向に方位をそろえ、規則的に配置されていることもうかがえます。過去の調査においても多くの掘立柱建物跡が方位をそろえて建てられていることが確認されており、今回の調査もその集落跡の一端を示しているものと考えられます。

これらの遺構が残された時期は、ちょうど伊勢国分寺や国分尼寺が甍を並べていた時期と考えられます。当遺跡はその近隣に営まれた集落跡であり、これらの寺院と無関係であったとは考えられません。



国分寺周辺の遺跡

国分北遺跡　調査区全景

国分遺跡（国分寺跡 第32次）

4月18日～5月11日
個人住宅建築に伴う緊急調査
国分町字北條

国分遺跡は、出土する瓦等から伊勢国分尼寺跡の推定地と考えられています。西へ0.5㎞の地点には僧寺とされる国史跡伊勢国分寺跡が所在しています。

今回の調査区は尼寺跡推定地内であるため、伽藍遺構発見への期待が高まっていました。しかし、瓦は一定量出土しましたが、残念ながら確認できた遺構は、鎌倉時代の掘立柱建物2棟・溝4条・土坑9基でした。

掘立柱建物はいずれも総柱建物です。このうち1棟は柱が沈まないように柱穴の中に石が置かれていました。

また、炉跡と考えられる土坑も見つかっています。全体はわかっていませんが、鍛冶にかかわるものと考えられます。

尼寺推定地の中心部で鎌倉時代の掘立柱建物が確認されたことから、尼寺衰退後には居住地としてこの地が活用されていたと考えられます。

国分遺跡　調査区全景

伊勢国分寺跡　遺物出土状況

伊勢国分寺跡 第33次

10月31日～11月16日
市道改良工事に伴う緊急調査
国分町

伊勢国分寺跡は一辺約一八〇mの伽藍地や講堂・金堂・回廊・中門・南門・僧坊の位置が明らかになっています。今回の調査区は伽藍地外の南東に位置します。平成10年には北隣接地が調査され、7世紀前半の方墳と鎌倉時代の青磁・青白磁・水晶玉が副葬された土壙墓などが見つかりました。前者は国分寺建立以前、後者は国分寺衰退期の状況を示すものです。

今回の調査では土坑3基、溝1条、小柱穴が確認され、国分寺に関連する遺構は見つかっていません。

検出された鎌倉時代の溝や柱穴は、当時の土地利用の一端を示すものですが、この段階で国分寺がどのような状況にあったか不明な点が多く、遺構の評価は難しいです。文献上では、『神宮雑書』建久3（一一九二）年注進状の山辺御薗に「当御薗内大鹿村国分寺領」とあり、12世紀末においても国分寺が何らかの形で存続していたことがうかがえます。国分寺跡周辺における過去の調査においても平安時代末から鎌倉時代に形成された瓦溜が散見され、この頃国分寺の興廃に関わる大きな画期があったことが推定されています。伽藍の状況はともかく、生活領域が僧寺の直近に形成されていたことは確かです。

伊勢国分寺跡　調査区全景

岡太神社遺跡 第3次

7月18日～8月1日
集合住宅建設に伴う緊急調査
岡田一丁目

岡太神社遺跡は、鈴鹿川右岸の段丘上に位置する式内岡太神社を中心とした遺跡です。過去の調査では平安時代末から鎌倉時代の溝・土坑が検出され、山茶碗などの中世陶器が出土しています。

今回の調査区は神社の南に隣接し、鎌倉時代の土坑1基、溝1条、井戸2基が確認されました。

井戸は、いずれも素掘りの井戸で、比較的浅いものです。調査時には一切湧水が見られませんでしたが、内壁の一部がオーバーハングしており、かつては湧水があり、内部が削られたとみられます。

今回の調査では、神社との関連がはっきりと確認できる遺構や遺物はありませんでした。ただし、調査区南辺で見つかった東西方向の溝は、地境溝の可能性があり、あるいは神社に関連するものかもしれません。

岡太神社遺跡　作業風景

岡太神社遺跡　井戸

西川遺跡
郡山野遺跡
郡山野田遺跡

第３次

5月23日～10月12日

宅地造成工事に伴う緊急調査

郡山町字野口ほか

西川遺跡・郡山野遺跡・郡山野田遺跡は、中ノ川右岸の河岸段丘上に位置しています。周辺は、これまでに『太陽の街』の造成工事に伴う郡山遺跡群の大規模な発掘調査が行われ、縄文時代から中世の多数の建物跡・古墳・須恵器窯跡などが見つかっています。

今回の調査では、主に西川遺跡の範囲を中心に竪穴住居7棟や掘立柱建物6棟のほか土坑、区画溝などを検出しました。出土した須恵器・土師器の特徴から飛鳥・奈良時代のものです。そのほかの出土遺物に土馬・石製模造品（勾玉）・陶製紡錘車・鉄斧などがあります。

郡山野遺跡では道路遺構が2条見つかっています。1条は東西に続く側溝と特徴的な波板状圧痕と呼んでいる連続する凹凸を確認しました。途中から北東方向へと緩やかに曲がります。

もう1条は路面の埋土が主に2層で構成されます。上層からは青磁などが出土し、中世頃まで継続して利用されていたと推定され、下層には中世の遺物は含まれないことから古代まで遡る可能性が考えられます。

そのほかの遺構として西川遺跡では鎌倉時代頃に良質な粘土を採掘したと考えられる土坑が南東部で3基見つかっています。土坑からは、山茶碗がほぼ完全な形で出土しています。

郡山野遺跡では江戸時代後半頃の瓦窯が見つかりました。達磨窯と呼ばれる形態のもので、窯の下部構造が良好に残っていました。桟瓦と呼ばれる江戸時代後半以降に一般的となる瓦の他に、窯の構築材も出土しました。

郡山は地名のとおり古代に奄芸郡の役所（郡衙）が置かれた地であると考えられています。調査地から北東へ約七〇〇ｍに位置する酒井神社周辺をふくむ三芝遺跡が、奄芸郡衙跡の有力な候補地と考えられています。多くの施設が建ち並び、周囲には郡衙に勤める役人やその家族が暮らしていたものと考えられています。今回調査された方位を揃える掘立柱建物群、そして西川遺跡第2次調査において廂を有する高級な掘立柱建物が検出され、また硯が出土していることから、この地も郡衙に関わる人々が生活していたのではないかと考えています。

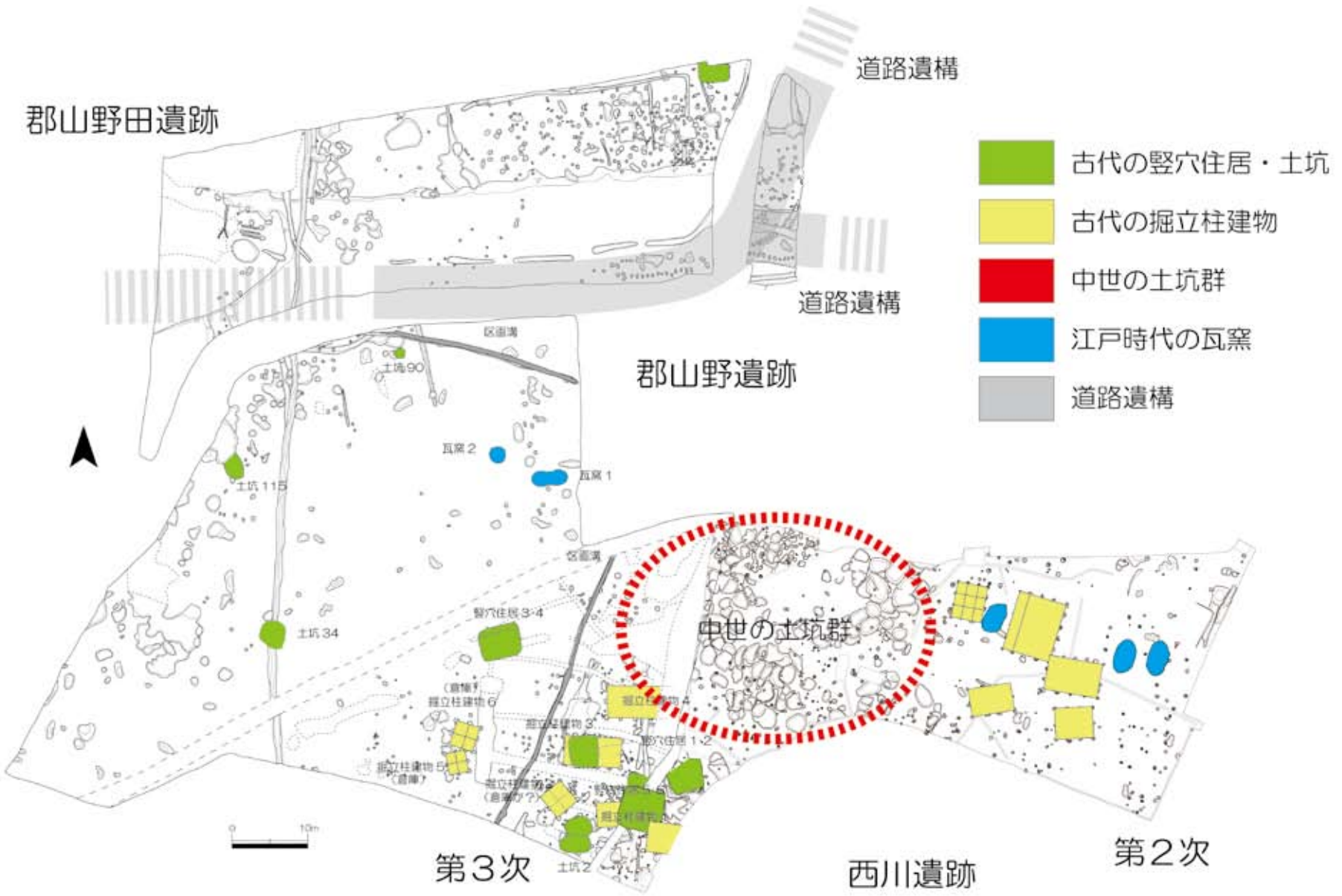
西川遺跡の第2次調査では、同様の鎌倉時代の土坑が数十基密集して見つかっています。また、近世の達磨窯も3基確認されています。中世には粘土の採掘場、近世

作業風景

掘立柱建物群

道路遺構

達磨窯



西川遺跡・郡山野・郡山野田遺跡遺構配置図

には瓦窯が築かれるなど主として生産の場であったようです。周辺は通称「カワラヤマ」と呼ばれています。それも瓦窯についての言い伝えや瓦の出土にちなむものでしょう。

塚腰遺跡　第2次

7月9日～9月4日
個人住宅建築に伴う緊急調査
郡山町字塚腰

塚腰遺跡は、前述の西川・郡山野・郡山野田遺跡から東へ約八〇〇mにあります。昭和55年に今回の調査区から南東へ約一〇〇mの地点で第1次調査が実施されました。その結果、弥生時代終末～古墳時代前期の方形周溝墓2基が検出されています。

今回の調査では、竪穴住居・掘立柱建物・溝・小柱穴が確認されました。

竪穴住居は、4.6m×3.7mの規模で長方形をしています。出土した土師器から古墳時代前期の建物と考えられます。この竪穴住居付近から、混入品と考えられますが、旧石器時代の角錐状石器が出土しています。

また、古墳時代後期の掘立柱建物が2棟確認されていますが、1棟は調査区による制約のため、全体の規模はわかっていません。

そのほかに調査区の隅で確認された土坑からは、飛鳥時代の須恵器が出土しています。

塚腰遺跡　竪穴住居

塚腰遺跡　作業風景

萱町遺跡　第2次

3月30日～4月28日
個人住宅建築に伴う緊急調査
神戸八丁目

萱町遺跡は、鈴鹿川右岸の低位段丘上に位置し、昭和17年に防火用水を掘削中に弥生時代後期の赤く塗られた土器が出土したことで古くから知られていました。平成16年度に宅地造成工事に伴い、調査が行われ、古墳の周溝や中世の掘立柱建物が確認され、埴輪や土師器、須恵器、山茶碗などの遺物が出土しました。

第2次調査区は第1次調査区から北東約一〇〇mのところに位置し、南東に向かって傾斜する地形に位置していたとみられ、南に向かって厚くなる黒褐色土の堆積が見られます。下層は自然堆積のもの、上層は古墳時代から平安時代の遺物を含んでいて、整地された層であると考えられます。

今回の調査では、竪穴住居1棟、掘立柱建物1棟、土坑7基、小柱穴などが確認されました。

方形の竪穴住居状の土坑は整地層を除去した自然堆積層の上面で検出しました。竈の痕跡はありませんが、南東隅では焼土を多く含む小柱穴を確認しました。また、不整形な土坑の東辺から石を3つ直線状に並べ、その横に土師器坏が数枚重ねられた状態で出土しています。

掘立柱建物は、調査区による制約のため、全体の規模はわかりませんが、南北・東西ともに1間分を確認しています。

また、近世の常滑焼甕を埋設した土坑も見つかりました。甕の底部は穴があけられていました。

出土した遺物は、主に平安時代前期のもので、土師器、黒色土器、灰釉陶器、緑釉陶器、製塩土器などが出土しました。第1次調査では硯も出土していることから、付近に有力者の住居があったようです。また、フイゴの羽口が出土していることから、鍛冶も行なわれていたようです。

萱町遺跡　調査区全景

萱町遺跡　作業風景

天王遺跡　第14次

9月13日～9月27日
個人住宅建築に伴う緊急調査
岸岡町字山田

天王遺跡は、鈴鹿川右岸の沖積平野に突き出した低位段丘の先端に位置し、北方に金沢川、南方に田古知川が流れ、両河川に囲まれています。周辺には、弥生時代の集落・古墳群・窯跡・古代寺院などバラエティに富んだ多くの遺跡が密集する地域です。

過去に医療施設建設及び改築、宅地造成等を要因とし、継続的に調査が実施されており、弥生時代から中世の遺構が多数確認されています。注目される主な遺構として、弥生時代後期に築かれた二重に溝を巡らせた大規模な環濠があります。上層が著しく削平されてしまったため、環濠内の集落の遺構についてはあきらかになっていません。

また、飛鳥・奈良時代に属する掘立柱建物群は、規則的な配置状況及び出土遺物により、役所のような施設の要素を含んでおり、地理的からも、公的な港湾施設的性格を有すると考えられています。

今回の調査で検出された遺構とは、溝、竪穴住居、小柱穴です。竪穴住居は、全形の把握には至っていませんが、やや長方形をしていると思われます。壁溝は確認しましたが、炉跡、貯蔵穴などは確認できていません。また、内部に埋土の状況から、主柱穴であると考えられます。主柱穴からは弥生土器が出土しており、弥生時代後期の竪穴住居であると考えられます。

南北方向の溝は、竪穴住居を壊し、強固な地山面を掘り込んで作られています。断面は台形状をしています。調査区外の南北へと続いています。土師器・須恵器が多く出土したことから、古墳時代後期の溝であると考えられます。

弥生時代後期の二重の環濠の外側で同時期の竪穴住居を検出することができたことにより、この時期に営まれた集落の広がりを考察する上で、重要な資料になると考えています。

天王遺跡遺構配置図

天王遺跡　作業風景

天王遺跡　調査区全景

平田遺跡　第17次

1月26日～2月8日

個人住宅建築に伴う緊急調査

弓削一丁目

平田遺跡は、鈴鹿川右岸の段丘上に位置します。平成16年度に宅地造成に伴い平田遺跡の西部（御門垣内地区）において発掘調査を行い、平成17年度には遺跡の東部（西弓削地区）においても新たな宅地造成に伴い発掘調査を行いました。その結果、弥生時代から中世の遺構を多数確認しています。御門垣内地区では古代の大型の四面廂付掘立柱建物とそれに伴う長大な掘立柱建物や道路遺構を確認し、西弓削地区でも企画的に配置された古代の掘立柱建物群が確認されています。これらの建物群は公的な施設もしくは有力者の居宅と考えられています。また、御門垣内地区では重弧文軒平瓦を含む多数の瓦が出土し、近隣に古代寺院の存在がうかがえます。

第17次調査では方形周溝墓1基、土坑4基、井戸1基、掘立柱建物1棟、溝1条を検出しました。

第17次調査区全景

第17次調査　遺物出土状況

方形周溝墓の周溝からほぼ完全な形に復元できた弥生土器壺が出土しています。また、方形周溝墓の周溝と重なるように掘られていた土坑からは土師器高坏2点が出土しています。

今回確認した井戸は出土遺物から平安時代前期には埋められたものと思われます。また、方形の井戸枠の痕跡が確認できました。これまでの調査では、中世の井戸が5基確認されていましたが、古代の井戸が確認されたのは今回が初めてです。

第17次調査　作業風景

平田遺跡　第18次

4月30日～5月16日

個人住宅建築に伴う緊急調査

弓削一丁目

第18次調査では、掘立柱建物2棟、竪穴住居1棟、溝1条を検出しました。

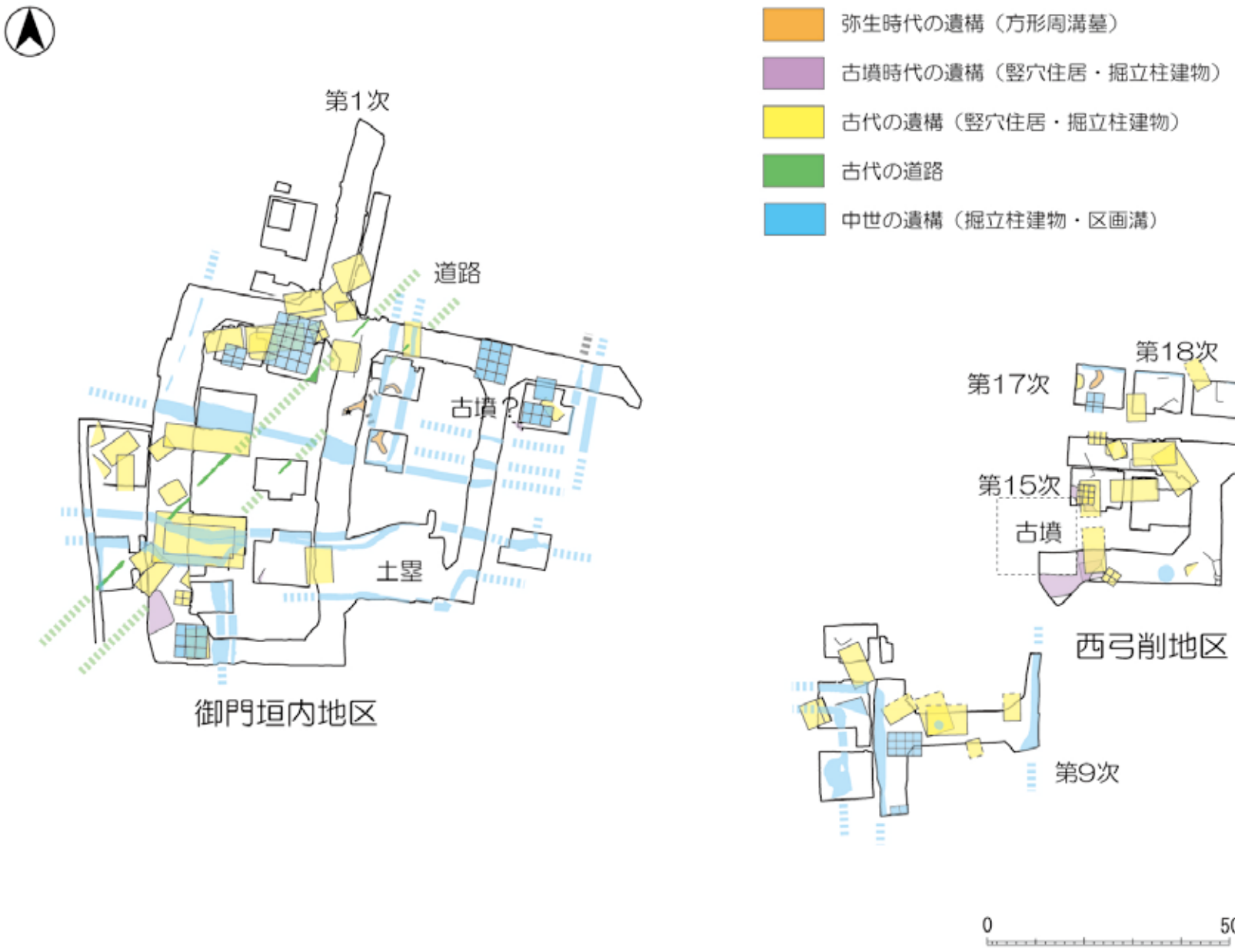
棟門と考えられる掘立柱建物は比較的規模の大きな一対の柱穴です。第9・15次調査では企画的に配置された建物群を確認しています。これらの建物群を囲む塀や溝はそのほかの調査でも明確に確認できていませんが、付属する門の可能性を考えています。

竪穴住居は著しく削平されていましたが、壁溝の一部をかろうじて確認しました。

調査区の北側で確認した溝は、第16・17次調査においても、その延長が確認されています。この溝は出土遺物から中世に機能していた土地を区画するためのものと考えています。第17次調査区では溝が途切れており、そこから出入りしていた可能性が考えられます。

今回の調査では遺物の出土量はどの遺構も少ない状況でしたが、一般的な集落ではあまり出土することのない畿内系暗文土師器が小柱穴から出土しています。

第１８次調査区全景



平田遺跡遺構配置図

竹野一丁目遺跡 第4次

6月29日～7月26日
宅地造成に伴う緊急調査
竹野一丁目

竹野一丁目遺跡は鈴鹿川右岸の低位段丘上に位置しています。過去の調査において、鎌倉時代の掘立柱建物及び水田、導水路等が検出され、この地域一帯には、鎌倉時代の一般的な集落跡が広がっているものと考えられています。特に中世の水田遺構の確認については、鈴鹿市では初の事例となりました。第2次調査においては、人名と思われる「よね」や兎の絵の墨書が見られる山茶碗等の貴重な遺物が出土しており、貿易陶磁及び石硯等の高級品の出土に加え、在村領主と推測される人物の屋敷地も確認しています。

今回確認した遺構は、溝3条、土坑4基、井戸1基、水田2枚です。

南北方向の溝は最終的には水田に繋がり、その位置関係から、導水用として機能する溝と考えられます。また、土坑状の落ち込みを確認しましたが、水捌け用の升（泥土坑）として使用されていた可能性が高いものと考えられます。

過去の発掘調査の成果から、調査区周辺地における中世の水田開発及び集落経営の様相について考察する重要な手掛かりを得ています。今回の調査では、水田及び導水路に加えて水田の北側に井戸がみつかったことからも、当時の水的資源の活用について興味深い結果を得ることができました。

竹野一丁目遺跡第４次　作業風景

竹野一丁目遺跡第４次　調査区全景

竹野一丁目遺跡 第5次

12月1日～12月7日
個人住宅建築に伴う緊急調査
竹野一丁目

第4次調査は宅地造成工事に伴い調査を行いました。第5次調査は分譲された宅地について調査を行い、位置関係は、第4次調査区の東に隣接します。

今回確認した遺構は溝2条、土坑1基、小柱穴です。

西側の溝は第4次調査の南北溝と並行し、対になると考えられます。両者の間隔はおよそ8ｍあり、土地の区画を兼ねた通路の側溝を構成していたと考えられます。

もう1条の溝と土坑の関係について、溝が土坑の西縁に沿い、かつ迂回するように流れている様子は、第1・2次調査で検出された水田跡と導水路とされる溝の関係に似ています。このことから水田遺構の北西隅部分である可能性も十分に考えられます。

そのほかに複数の小柱穴が確認できましたが、建物としてのまとまりはわかっていません。

竹野一丁目遺跡第５次　調査区全景

八重垣神社遺跡 第4次

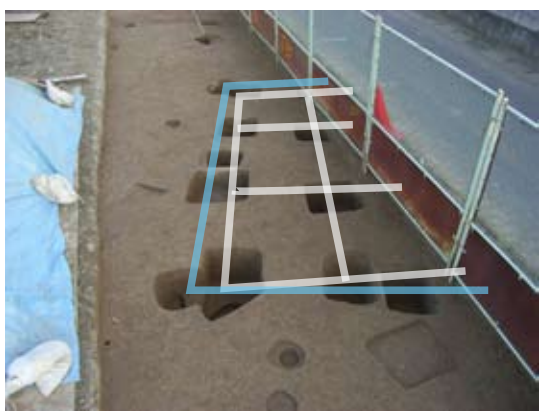
7月25日～8月25日
道路整備に伴う緊急調査
十宮町字宮ノ前

八重垣神社遺跡は、県営ほ場整備事業に先立つ範囲確認調査によって新たに確認された遺跡です。平成13～14年にかけて三重県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施し、弥生時代前期～古墳時代後期の流路、古墳時代前期の竪穴住居、土坑、溝等を検出しています。一帯は鈴鹿川右岸の谷底平野で、ほ場整備実施前までは条里地割や鈴鹿川旧河道の痕跡を地表面に留めていました。

今回の調査では古墳時代後期の流路、溝2条、掘立柱建物1棟、土坑1基を検出しました。

見つかった流路は位置関係から見て同一のものと思われますが、掘り方や護岸の杭の有無などに違いがあるため断定には至っていません。

また、溝は最終の埋没時期には差がありますが、ほぼ直交し内部に掘立柱建物が存在することから、この地区でも中心となる遺構群を区画する溝であったかもしれません。


八重垣神社遺跡第５次　掘立柱建物

八重垣神社遺跡第４次　区画溝・掘立柱建物

八重垣神社遺跡 第5次

10月15日～11月26日
道路整備に伴う緊急調査
十宮町字宮ノ前

第4次調査に引き続き行った第5次調査では、古墳時代後期の流路、溝、掘立柱建物、土坑を検出し、そのほかにも竪穴住居や柱穴列を確認しました。

今回確認した複数の流路は、いずれも浅く、同じ方向へと流れています。土師器や須恵器、韓式系土器が出土しています。

確認できた掘立柱建物は、側柱建物から総柱建物へと建て替えられていることがわかりました。ただし、幅3ｍと限られた調査区であるため、建物の全体の規模はわかっていません。見つかっているいくつかの柱列も、おそらく建物になると思われます。また、掘立柱建物や竪穴住居は、東側を流れる流路と並行するように建てられています。

八重垣神社遺跡は、三重県埋蔵文化財センターによって行われた第1～3次調査の成果から、八重垣神社の東側一帯に広範な古墳時代集落域が想定されていました。しかし、今回新たに実施した八重垣神社の東側では全く遺構が検出されませんでした。これまでの調査結果をまとめると旧河道・流路に沿った自然堤防上を利用して帯状に立地する集落の在り方が見えてくるように思えます。ただし、鈴鹿川は何度も大氾濫を繰り返していることは疑いなく、今回検出された流路遺構等も上面を氾濫によって形成されたとみられる砂質シルト層に厚く覆われていました。そのため、八重垣神社の東側で遺構がみつからなかったことについて、鈴鹿川の氾濫の際により高所に存在した遺構が削られ、失われてしまった可能性を全く否定してしまうことはできません。後背湿地の利用の問題と合わせて集落遺跡の範囲をどうとらえていくかが今後の課題と考えています。

八重垣神社遺跡第５次　流路

八重垣神社遺跡第５次　遺物出土状況

伊勢国府跡　第22次

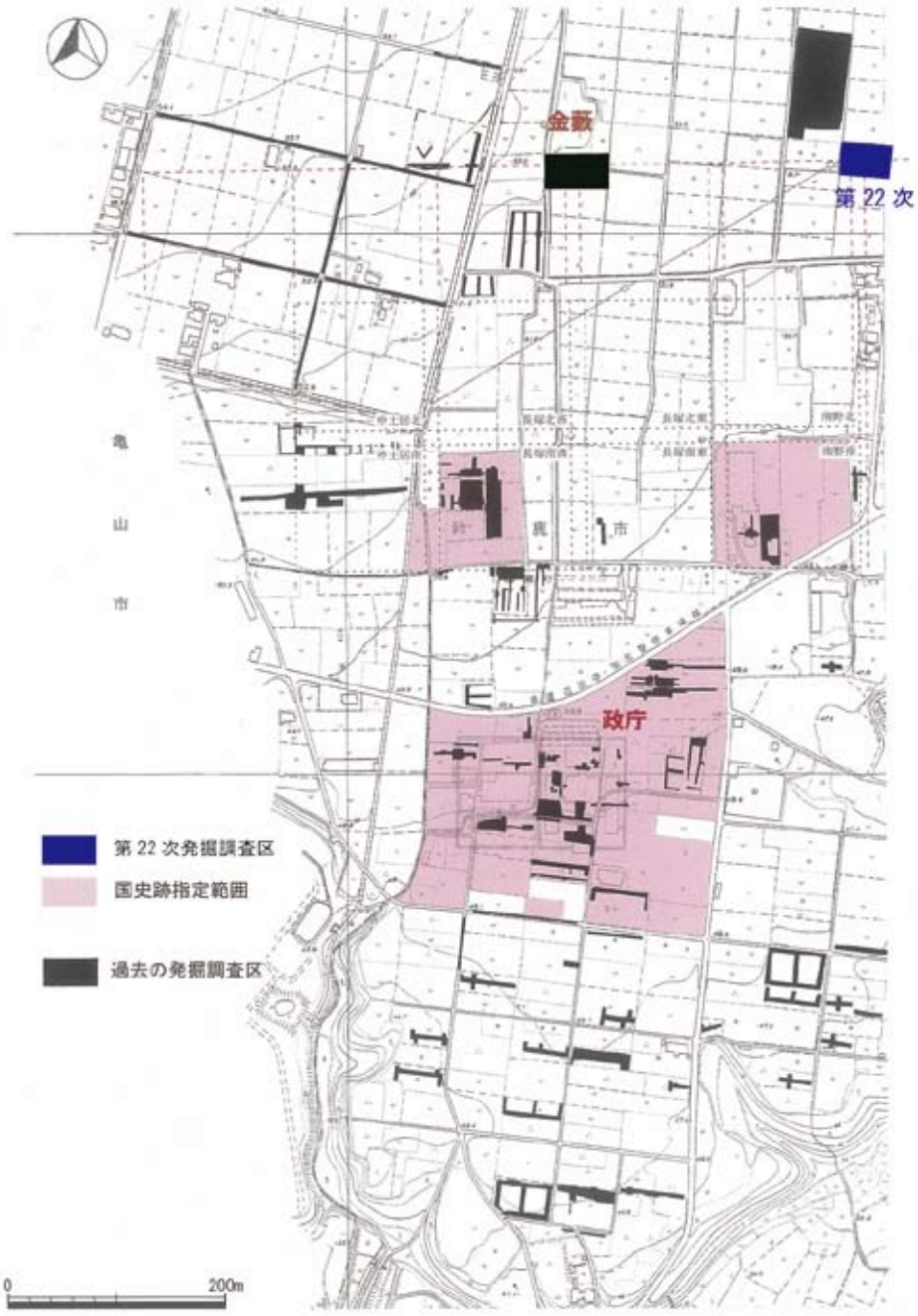
10月1日～11月30日
学術調査
広瀬町字西野

伊勢国府跡の学術調査は平成4年から始まりました。これまでに政庁跡、政庁の北側に広がる方格地割（北方官衙）を確認し、平成14年、国史跡に指定されました。ここ数年は、方格地割の範囲確認を目的として調査を継続してきました。

これまでの成果から方格地割の北東隅と推定される範囲を発掘調査地に選定し、区画溝の交点を以てその北限と東限を確認するために実施しました。

その結果、溝、小柱穴、風倒木痕を検出しましたが、想定していた方格地割を示すような区画溝は検出できず、この地区まで施工されていなかった可能性がでてきました。ただし、遺構が削平されて残っていなかったとも考えられるため、今後も追加の調査が必要です。

また、政庁の真北・方格地割に接して位置する「金藪」と呼ばれる高まりの地形測量調査も併せて実施しました。古墳、建物の基壇といった意見が出されていますが、地形測量の結果だけでは判断はできませんでした。



伊勢国府跡　調査区位置図

作業風景

金藪

発掘調査地位置図
（1/75,000）